慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Tel Quel は何をしたか(II) : Tel Quel およびその周辺で起こったこと
Sub Title	Qu'ont fait les telqueliens? (II) : autour de la revue Tel Quel
Author	阿部, 静子(Abe, Shizuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.46 (2008.) ,p.171- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森英樹教授・ 西尾修教授・ 高山晶教授退職記念論文集 = Mélanges offerts à Mori Hideki, à Nishio Osamu, et à Takayama Aki
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080331-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Tel Quel は何をしたか（Ⅱ）

── Tel Quel およびその周辺で起こったこと ──

阿　部　静　子

0.0. Tel Quel 誌と時代のパラダイム

0.1. ソレルスが見たバタイユ

1972 年 6 月 29 日から 7 月 9 日にかけてスリジー・ラ・サル国際文化センターにおいて、フィリップ・ソレルスの司会のもとにシンポジウム「文化革命にむけて：アルトー／バタイユ」が開催された。そこで行った「アクト・バタイユ」と題する講演の冒頭、ソレルスは次のような「まるで古典的な物語を語り始めるような」[1] 口調でジョルジュ・バタイユについての回想を語っている。

> Je revois Georges Bataille dans un bureau où il passait quelquefois. Ce bureau ouvre sur un jardin intérieur accessible par une fenêtre. Bataille veut visiter le jardin. Fatigué, il a du mal à sauter. Je le prends par le bras, nous retombons sur la terre et l'herbe. Les feuilles sont noires. Il fait beau.[2]

上の光景は、すでに心身を病に蝕まれていたバタイユが、亡くなる 1 年前の 1961 年にソレルス等が刊行する雑誌『Tel Quel』の編集部を訪ねたときの様子である。「アクト・バタイユ」講演記録は、シンポジウムが開催された 1972 年冬の Tel Quel 誌 52 号「アルトー・バタイユ特集号」に掲載された。またシンポジウム全体の内容は、それぞれ『アルトー』、『バタイユ』

のタイトルのもとに1冊にまとめられて翌年U.G.E.社から10／18叢書として刊行されている。その『バタイユ』の巻の前書きでソレルスは、バタイユがその経歴において2種類の否認を被ったと述べている。1つはジャン＝ポール・サルトルによるもの、もう1つはアンドレ・ブルトンによるものである、と[3)]。ソレルスが名前を挙げた2人は、Tel Quel誌がそれまでに掲載したバタイユによる3つの重要な記事と各々直接的あるいは間接的に関係しており、バタイユにとってそれらの事実が如何に重要な意味を持っていたかを物語っている。そればかりでなく、サルトル、ブルトンとバタイユの間でそれぞれ交わされた論争を検証することは、結果的に当時の文化状況の一側面を浮かびあがらせもする。すなわちこの2つの名前にアルベール・カミユとアラン・ロブ＝グリエを加えるならば、そこに幾つかの符合、および互いの間に働いた磁力のようなものを確認出来るとともに、文学・思想のパラダイムが形作られるのを見ることが出来るのだ。一方で、上の情景の生まれた1961年当時を時代のクロノロジカルな流れの中においてみた場合、大戦後の反動と修正の混沌とした動きの後に登場して思想界を席捲した不条理哲学と実存主義が漸く終熄期を迎えつつあり、ヌーヴォー・ロマン、ヌーヴェル・ヴァーグ作品の百花繚乱の様相も落ち着きを見せつつあった時期にあたる。その後、アルジェリア戦争終結を経たフランスにおいて、国民の心は次第に倦怠に蝕ばまれるようになっていったのであるが[4)]、後の時代はこの時期を68年の5月革命へと続く道程の一こまとして捉えることになるのである。Tel Quel誌はこうした時代の流れの中にあって重要な意味を持つ各々の点を結びつけるようにして、かつそれぞれと密接な関係を保ちつつ活動を続けていったのである。

0.2. 季刊文芸誌『Tel Quel』

Tel Quel誌は1960年3月に、スイユ社から創刊された季刊文芸誌である。当時出版界には50年余の伝統を誇る『N. R. F（エヌ エル エフ）（la Nouvelle Revue Française）』誌やサルトルの『Les Temps Modernes（レ・タン・モデルヌ）』誌、ルイ・アラゴンの『Les Lettres Françaises（レットル・フランセ

ーズ)』誌等の有力文芸誌が乱立しており、その狭間にあって Tel Quel 誌は、ソレルス以外は殆ど無名の若者 6 人が編集に携わる予算もごく限られた雑誌であった。しかし創刊号の「宣言」[5] で明言しているように、ヴァレリーの著作に由来する雑誌の名前の通り、「あるがままに（“Tel Quel”）」、いかなるイデオロギーにも与(くみ)せず、ジャンルを問わず芸術を探求する時代のアヴァンギャルドたることを目指そうとしていた。「宣言」の原稿作成に当たったソレルスと詩人フランシス・ポンジュの 2 人は、過去の各々の時代のアヴァンギャルドが掲げてきた「宣言」、すなわち 20 世紀初頭マリネッティがパリでメディアを巻き込んで行った「未来派宣言」、ツァラの「ダダ宣言」、ブルトンの「シュルレアリスム宣言」と引き継がれてきた「宣言」の歴史を受けて、その新たな継承者となることを十分に意識していた。「新芸術至上主義」の謗(そし)りを受けようと、アルジェリア戦争への言及が無いことを非難されようと、Tel Quel 誌の編集方針はあくまでもこの「宣言」に拠るものであり、揺るぎのないものであるという確信に支えられていたのだった。

1.0. ジョルジュ・バタイユの遺産

1.1. Tel Quel 誌とバタイユ

ソレルスは 17 才の時に『内的体験』を読んで衝撃を受けて以来、バタイユを 20 世紀の最も重要な作家の 1 人として自分の中に位置づけてきた。他の Tel Quel 編集メンバーについても事情は同じであり、雑誌の創刊以前から多大な影響を受けてきたこの作家を Tel Quel 誌上で継続的に扱うことは、ごく自然に雑誌の既成方針となった。以後、ソレルスを中心としてメンバーが一貫してバタイユを支持し、記事を掲載し続け、更にはガリマール社からの全集刊行に尽力したことが、現在の思想・文学のジャンルにおけるバタイユの重要性を確固としたものとすることに大きく貢献したことは間違いないだろう。冒頭に引用したシーンにおいて、バタイユを支えようと差しのべられたソレルスの手は、バタイユが遺した貴重な財産を確実に守り続けたと言えよう。

ところでTel Quel誌上に掲載されたバタイユの記事の中で特に重要なものは、1961年春Tel Quel 5号に掲載された「エロスの涙」、1962年夏Tel Quel 10号の「非－知についての講演」、1968年夏Tel Quel 34号の「『老練なもぐら』と超人および超現実主義者なる言葉に含まれる超という接辞について」の3つである。「エロスの涙」は同じ年に単行本としてポヴェール社から刊行されており、Tel Quel誌に掲載されたのは全体の約3分の1に当たる「第1部　始まり（エロスの誕生）」全文で、仕上がったばかりの草稿をTel Quel編集部が清書したものである。「非－知について」は1951年1月から1953年2月にかけて、ジャン・ヴァール主宰の「哲学学院」で行った一連の講演のやはり草稿を、Tel Quel編集部が清書したものである。講演の時期は、サルトル・カミユ論争とその余韻が残る時期に当たっている。「『老練なもぐら』」は1929年『シュルレアリスム第2宣言』の中で、ブルトンがバタイユを非難した文章への反論であり、本来『ビフュール』誌に発表される予定が1931年にこの雑誌がつぶれたためTel Quel 34号に初めて掲載されたものである。1930年前後、バタイユがブルトンと熾烈な論争を繰り広げていた当時のこの論文が、1968年の5月革命時に戦闘的な声明を掲げた[6]Tel Quel誌上に掲載されていることは興味深い。これら3つの論文がそれぞれ間隔をおいて、執筆年代を遡る形で、いずれも初出でTel Quel誌上に掲載されることになった経緯にはそれぞれ意味があるように思われる。

1.2.『エロスの涙』

ソレルスの回想に登場するバタイユの姿は、誕生したばかりのTel Quel誌と最晩年のバタイユの交流を浮き彫りにするだけにとどまらない。この情景は同時に、バタイユが当時背負っていたものとソレルス等が対峙していたものを、2つながらに明らかにするものでもある。

バタイユの最後の著作『エロスの涙』は、自らに残された時間の長くないことを自覚していたバタイユが、再三の発作や体調不良に執筆を阻まれながらもこの作品に賭ける情熱と文字通り身を削るような仕事振りによって完成させたものであり、また傍らにあってバタイユを叱咤激励し、時には残酷な

までに執筆を強要したという[7] 友人であるロ・デュカの尽力によって、大幅に遅れながらも出版へこぎ着けたものである。57 通に上るデュカ宛の手紙からは、弱まる記憶と視力の低下と闘いながら、また長女がアルジェリア戦争に関連して拘束されるという不幸に見舞われながらも何としても『エロスの涙』を立派な本に仕上げたいと願って、ひたすら原稿を書き続けるバタイユの切実な思いがひしひしと伝わってくる。

Fontenay-le-Comte, le 5 mars 1960[8]

Mon cher ami,

J'ai dû vous apparaître, du fait de ma dernière lettre, en bien mauvais état. S'il s'agit de souffrance, en effet, vous ne vous trompez pas. Mais il est exclu que je néglige quoi que ce soit pour les Larmes d'Éros. (…) *Je voudrais en faire un livre plus remarquable qu'aucun de ceux que j'ai déjà publié.* (…)

G.B.

Orléans, le 16 décembre 1960[9]

Mon cher ami,

Je m'approche de la fin de mon livre. (…) *il me semble que le livre devrait être l'un des meilleurs que j'ai écrit, en même temps l'un des plus accessibles.* (…)

G.B.

『エロスの涙』が完成したのは翌年 5 月であった。『ラスコーの壁画』、『エロティシズム』、『ジル・ド・レ論』と書き継がれてきた内容の集大成ともいうべきこの作品は、先史時代から書き起こして、ディオニュソス、サド、ジル・ド・レ、マニエリスムからシュルレアリスムに至るエロティシズムの歴史を、ふんだんな図版とともに辿る形になっている。

Les Sables-d'Olonne, 24 juillet 1959[10)]

Mon cher ami,

(…) *J'ai pu faire une mise au point de mon plan et de mes notes sur l'illustration possible. Je me suis en tout cas assuré les photographies des scènes remarquables du film de Resnais sur Hiroshima, qui répondront à la conclusion du livre. Je voudrais faire une première partie sur Éros cruel, où je parlerai de Gilles de Rais,* (…) *La seconde partie porterait sur la beauté et commencerait par une étude sur l'attrait sexuel et la beauté à l'époque préhistorique* (…)

G.B.

［*P.-S.*］*Le meilleur titre pour mon livre me semble maintenant LES LARMES D'ÉROS. Il plairait beaucoup à Pauvert.*

上の手紙の中にあるアラン・レネの映画『24 時間の情事（邦題)』の写真は実現していないが、バタイユがかつてヒロシマに関する記事を書いている事実を思い起こさせる。バタイユが追伸で自信を持って提案しているタイトルのアイディアは、フォンテーヌブロー派の『アドニスの死に涙するヴェニス』からとられている[11)]。バタイユは全ての図版の選定から掲載順序、ページ割り、レイアウト、写真のトリミングにまで心を砕き、意図した図版を手に入れるために労を惜しまなかった。バタイユがこだわった図版の数々は、ラスコー、アルタミラの洞窟画からデューラー、クラナハ、レンブラント、ゴヤ、ギュスタヴ・モロー、シュルレアリストにピカソ、ピエール・クロソウスキーに至るまで多彩で、バタイユの旺盛な興味と深い造詣を示している。そして結びの章には、バルテュスの絵と向かい合わせにバタイユとは切り離せない中国人死刑囚の拷問の写真を載せている。1925 年、当時深刻な精神的危機にあったバタイユが精神分析を受けていた心理学者ボレル氏に貰ったというこの写真は、以下の一文にあるようにバタイユにとって啓示の役割を果たし、窮地から救うと同時にその後の執筆活動を生む母体ともなったものである。

> Ce que soudainement je voyais et qui m'enfermait dans l'angoisse — mais qui dans le même temps m'en délivrait — était l'identité de ces parfaits contraires, opposant à l'extase divine une horreur extrême.[12)]

下の『エロスの涙』序文の最後の部分を読むと、この写真によってもたらされたものがバタイユにとって計り知れない意味を持っていたことが改めて知られると同時に、バタイユが生涯を通じてその魅惑について語り続けそこから執筆の糧を得たもの、そしてアセファルの活動の原動力ともなったものが何であったかが分かる。

> *Le sens de ce livre est,* en un premier pas*, d'ouvrir la conscience à l'identité de la «petite mort» et d'une mort définitive.* (…) *Par la violence du dépassement, je saisis, dans le désordre de mes rires et de mes sanglots, dans l'excès des transports qui me brisent, la similitude de l'horreur et d'une volupté qui m'excède, de la douleur finale et d'une insupportable joie!* [13)]

1.3.『エロスの涙』とソレルス

Tel Quel 誌 5 号には『エロスの涙』第一部の文章部分のみが掲載されているが、ポヴェール版に掲載されている図版を調べてみると興味深い符合を見つけることが出来る。バタイユは全体の半ばほどに、プッサンの『エルマフロディテ』と『恋人たちと覗き屋』の 2 枚の絵を掲載している [14)]。いずれもバタイユの考えるセクシュアリテを具現した例であるが、その同じプッサンの絵について、ソレルスもやはり Tel Quel 誌 5 号で「プッサンを読む」というタイトルで論じているのだ [15)]。これは以後、次々に書かれるソレルスの絵画論の第一作目になるが、ここにバタイユと共通した興味のありかを確認することが出来る。さらにバタイユは『エロスの涙』最終部近く、若い世代で最も重要な英国人画家の作品としてフランシス・ベーコンの『部屋』を取り上げている [16)]。フランシス・ベーコンは、今でこそ改装なったポン

ピドゥー・センターに一室をあてがわれているが、当時はそれ程注目された存在ではなかっただろう。そして 30 年を隔てた 1996 年、ソレルスによる画文集『フランシス・ベーコンのパッション』[17] が書かれることになるのである。これらの符合はいずれも、ソレルスのバタイユに対する思い入れと崇敬を鑑みれば当然と言えようが、やはり見逃せないことにも思えるのだ。

2.0. サルトルによる第 1 の否認

2.1.「新しい神秘家」

『エロスの涙』の完成を目前にした 1961 年 2 月、バタイユは当時館長をしていたオルレアン図書館で、『レクスプレス』誌の記者で作家のマドレーヌ・シャプサルのインタビューを受けている。『エロスの涙』について、それ程新しい知識を必要としないのに体調のせいで執筆が遅れたことを嘆き、また自分の話が明快さを欠いているのではないかと時に不安を口にしながらも、エロティシズム・笑い・死という、自身の中心概念を軸に展開されている本の内容について情熱をもって語っている。そしてバタイユにとってエロティシズムとは何を表象するのか、というシャプサルの質問に答えて「それは内的体験（“une expérience intérieure”）です。」と言い切っている[18]。「内的体験」とは 1943 年、それまで実名でまとまった本を刊行していなかったバタイユが初めて出版した本の題名である。ところでサルトルは、『内的体験』が刊行されるとすぐに『カイエ・デュ・シュッド』誌に「新しい神秘家」のタイトルで書評を寄せ、始めは婉曲に次第に厳しく、最後はソレルスが「弾幕射撃」[19] と表現したような激しい調子で批判している。記事冒頭のバタイユの文章表現に関する正鵠を得た分析は、突然「だが形式が全てではない。内容を見てみよう[20]。」という一言と共にその内容に見られる矛盾を暴くことに突入する。

この 1 文は重要な問題を孕んでいる。というのはバタイユが「内的体験」について語るとき、形式と内容の境界は宙吊りにされるということがあるからだ。だがサルトルは、「体験」における「自己」の分析を通じてあくまで

もその点を矛盾として追求し続ける。

> Ainsi le dehors s'est glissé au dedans de moi-même; la mort n'illumine qu'un fragment de Nature; au moment où l'urgence de la mort me révèle à moi-même, M. Bataille s'est arrangé, sans le dire, pour que je me voie avec les yeux d'un autre.[21)]

サルトルが到底受け入れがたいとするこうした「自己」のあり方は、バタイユとほぼ同年代のエマニュエル・レヴィナスの、柔軟性に満ちた「自己」のとらえ方とどこか通底しているものがあるように思われる。レヴィナスの主著『全体性と無限』が刊行されたのは 1961 年になってからであるが、バタイユはそれ以前にしばしばレヴィナスを引き合いに出し、またレヴィナスについて論じてもいるからだ。サルトルがバタイユの中に指摘するディオニュソス的陶酔、消尽としての未開社会の祭り、アモクの狂熱などはいずれもバタイユの「体験」に欠かせないものであり、また「非 - 知」（“non-savoir”）に遭遇する契機でもある。しかしサルトルはバタイユの「非 - 知」にヤスパースの影を見るだけでなく、さらにその矛盾をつこうとするのである。

> (…) à tout coup le non-savoir, qui n'était préalablement *rien*, devient l'au-delà du savoir. (…) Supposons que j'écrive, comme M. Bataille: «Et surtout «rien», je ne sais «rien».». Voilà un *rien* qui prend une étrange tournure: il se détache et s'isole, il n'est pas loin d'exister par soi.[22)]

ここに引用した文中、「非 - 知」と不可分のものとして使われている “rien”（無、何でもないもの）の概念は、まさしくサルトルが分析している意味において重要である。この “rien” は、バタイユが生涯、“poésie” として追求した概念に通じるものであり、例えばマラルメの “fleur”（「花」）の

ように、まさに無から立ち現れるものに他ならない。こうした事実を裏付けるエピソードとして、死の間際の 1961 年末から 1962 年 1 月にかけて、バタイユが『詩への憎しみ』という逆説的タイトルをもった旧作を『不可能なもの』と改題して出版することを、ヌーヴォー・ロマンの生みの親、ミニュイ社のジェローム・ランドンと打ち合わせていることが挙げられる[23)]。だがサルトルはバタイユの「不可能」にドロリズムしか見ようとしない。

> Le mot d'impossibilité revient souvent sous sa plume: ce n'est pas par hasard. Il appartient sans aucun doute à cette famille d'esprits qui sont par-dessus tout sensibles au charme acide et épuisant des tentatives impossibles. C'est son mysticisme plus que l'humanisme de M. Camus qu'il conviendrait de symboliser par le mythe de Sisyphe.[24)]

上の引用文中、サルトルはカミユを引き合いに出しているが、このころのサルトルは『異邦人』を絶賛する論文を書いた直後であり、8 年後の激しいやりとりを予想させるものは何もない。結局サルトルはこの論文でバタイユを「神秘家」と決めつけ、最後は次のように締めくくっている。

> Mais les joies auxquelles nous convie M. Bataille, (…) ne valent pas plus que le plaisir de boire un verre d'alcool ou de se chauffer au soleil sur une plage. (…) Mais la critique littéraire trouve ici ses limites. Le reste est l'affaire de la psychanalyse.[25)]

2.2. バタイユの反論

サルトルによる批判を受けてすぐバタイユは、「ジャン＝ポール・サルトルに答える（《内的体験》の弁護）」と題する反論を書いている。そのやり方は真っ向から反駁するのではなく、相手の論旨に同調しながら、あるいは自身の論述の脆弱な点を認めながら、しかし決して退くことなくねばり強く論理の展開の可能性を探り続けるものである。

> Sartre décrit fort heureusement mes mouvements d'esprit à partir de mon livre, soulignant leur niaiserie du dehors, mieux que je ne pouvais faire du dedans (j'étais ému): aperçus, disséqués par une lucidité indifférente, il faut dire que le caractère pénible en est comiquement accusé (comme il convient): (…)[26)]

バタイユは、自分の思考は瞬時に捉えがたく疾走するものであると述べて暗にサルトルの速度不足を皮肉ると同時に、「体験」は批評には捉えられない運動であり、従って陶酔とも苦悩とも無縁なサルトルには理解できないものであるだろうと明言している。

> Exprimée sans détour, une mobilité trop grande des concepts et des sentiments (des états d'esprit) ne laisse pas au lecteur plus lent la possibilité de saisir (de fixer).(…)
>
> Tandis que Sartre que n'affole ni ne grise aucun mouvement, jugeant sans les éprouver de ma souffrance et de ma griserie du dehors, *conclut* son article en s'appesantissant sur le vide: (…)
>
> Ce que dans l'*Expérience intérieure* j'essayai de décrire est ce mouvement qui, perdant toute possibilité d'arrêt tombe facilement sous le coup d'une critique qui croit l'arrêter du dehors puisque la critique, elle, n'est pas *prise* dans le mouvement. Ma chute vertigineuse et la *différence* qu'elle introduit dans l'esprit peuvent n'être pas saisies par qui n'en fait pas l'épreuve en lui-même: dès lors on peut, comme Sartre l'a fait, successivement me reprocher d'aboutir à Dieu, d'aboutir au vide! ces reproches contradictoires appuient mon affirmation: *je n'aboutis jamais*.[27)]

この反論の末尾近くでバタイユは、サルトルが指摘している自分とカミユの相似点を認め、さらにこの文章を「反抗」というカミユのキーワードで結

んでいる。

> Sartre a raison de rappeler à mon propos le *mythe de Sisyphe*, (…) Ce qu'on peut attendre de nous est d'aller le plus loin possible et non d'aboutir. (…)
>
> (…) n'accepter rien de ce qu'il est, sinon de tendre à l'au-delà de ce qu'il est. Cet être que je suis est révolte de l'être, est le *désir* indéfini: (…)[28)]

ところで先の引用文中でバタイユは、「バタイユは神に到達し、次いで空虚に到達しようとするのである。」というサルトルの言葉を断固として否定している（下線部）が、後年、前述のシャプサルとの対談で、改めて「空虚な場所」について次のように語っている。

> Tout le monde sait ce que représente Dieu pour l'ensemble des hommes qui y croient, et quelle place il occupe dans leur pensée, et je pense que lorsqu'on supprime le personnage de Dieu à cette place-là, il reste tout de même quelque chose, <u>une place vide. C'est de cette place vide que j'ai voulu parler.</u> [29)]

この「空虚」こそが、バタイユがニーチェから引き継いだものであり、「体験」はバタイユの「ニーチェ体験」とも言うべきものと不可分のものであることが以下の文からも分かる。

> Pour Nietzsche, ce qu'il a appelé la mort de Dieu laissait un vide terrible, quelque chose de vertigineux, presque, et de difficilement supportable.[30)]

バタイユは上に引用した反論以後も、サルトルの批判を受けて自身の思考

を論理化する努力を最後まで続けている。このことはこれより9年後、サルトルの『殉教と反抗』が刊行された後、数年間ペンを執れなかったジャン・ジュネの場合を思い起こさせずにはおかない。バタイユの場合はこのあと約20年近くの間、旺盛な執筆活動を展開し、一方では未刊の著作の刊行、既刊の著作の再編、雑誌『クリティック』への記事の掲載をしているのである。

『内的体験』刊行の翌年には、マルセル・モレ邸で催された「罪について」の討論会[31)]でサルトル等を相手に自分の思考についての理解を得るために忍耐強く説明を続けており、また次の章で扱う「非－知について」の講演においても一層の論理の展開に努めている。そしてその結論が、シャプサルの質問に答えた「エロティシズムは内的体験のことです。」という一言に集約されているのではないだろうか。

3.0. サルトルとカミユの確執

3.1. カミユの苦悩

1999年12月、フランソワーズ・ジルーは『Le Nouvel Observateur（ヌーヴェル・オプセルヴァトウール）』誌上、「カミユ、傷ついた人間」というタイトルの記事でジャン・ダニエルのドキュメンタリー・フィルムを紹介している。内容は、アルジェ時代から1957年のノーベル賞受賞に至るカミユの栄光と苦難に満ちた短い生涯を描いたものである。母親に育てられた貧しい幼年時代や、結核のせいで教授職につけなかったり、レジスタンス運動に身を投じることが出来なかった不如意はカミユの苦悩の真の要因ではないと証し、カミユを苦しめたのは、ソ連の強制収容所の存在を巡って共産党と距離を置くようになったことをきっかけに、サルトルを始めとするフランス知識人との間に出来た溝であり、数々の誹謗中傷を一身に被ったことだったという。そうした中から生まれたのが『コンバ』誌に発表された「犠牲者でも死刑執行人でもない」あり方であり、哲学的大作『反抗的人間』であったのだが、しかし他でもないこの『反抗的人間』が、サルトルとの論争とその結果としての決別の原因になったのである。ドキュメンタリー・フィルムは、

カミユの友人ルネ・シャールの美しい言葉で結ばれているという。

> Dans un article célèbre des «Temps modernes», Sartre l'accusa d'*«ôter à l'humanité ses raisons de vivre»,* rien de moins, et dénonça son *«incompétence philosophique»*. Comme il a souffert alors, Camus, comme il a souffert... Catherine Sollers dit qu'il a eu la tentation de se suicider. Le film se clôt par une citation de René Char, qui était son ami: «*La lucidité est la blessure la plus rapprochée du soleil.*» Elle l'a incendié. [32)]

カミユの苦悩はアルジェリア戦争によって増幅されることになった。停戦を訴えつつも、同郷のフランス人に同胞愛を感じる一方で、アルジェリア人にも深い共感を寄せるカミユの立場は必然的に複雑なものとなり、両陣営から攻撃される結果となった。カミユは自省的小説『転落』刊行の 4 年後の 1960 年、47 才で交通事故死している。

3.2. サルトル『異邦人』論とサルトル・カミユ論争の落差

1943 年 2 月サルトルは、前年に出版されるやたちまち評判になったカミユの『異邦人』について、深い共感を示した記事を雑誌に寄せている。その同じサルトルが、同年末には前述のように、「新しい神秘家」によってバタイユを徹底的に批判することになるのだが。サルトルの表現によれば『異邦人』は小説そのものが「異邦人」なのであり、作者と一体であるもの、作者の生から自然にはがれ落ちたものである。それはシュルレアリストのテーマでもあった。

> (…) <u>ce roman était lui-même un étranger</u>. Il nous venait de l'autre côté de la ligne, de l'autre côté de la mer; (…)
>
> Nous retrouvons ici, passé au crible du soleil classique, un thème du terrorisme surréaliste: l'œuvre d'art n'est qu'une feuille détachée

d'une vie.(…) *L'Étranger* est un feuillet de sa vie. [33)]

サルトルは『異邦人』における「不条理」（"absurdité"）を『シーシュポスの神話』とも関連づけながら分析すると同時に、その不条理を浮き彫りにする形で用いられている複合過去時制の効果を強調している。

> C'est pour accentuer la solitude de chaque unité phrastique que M. Camus a choisi de faire son récit au parfait composé. Le passé défini est le temps de la continuité: «Il se promena longtemps», ces mots nous renvoient à un plus-que-parfait, à un futur; (…) «Il s'est promené longtemps» dissimule la verbalité du verbe; le verbe est rompu, brisé en deux: (…) le caractère transitif du verbe s'est évanoui, la phrase s'est figée; sa réalité, à présent, c'est le nom.[34)]

このサルトルによる『異邦人』論に象徴されるようなサルトルとカミユの間の相互理解と敬意に発した関係は、しかしその後ソビエト共産党に対する態度に集約されるお互いの政治姿勢の相違から来る齟齬によってひび割れが生じ、ついにはカミユの『反抗的人間』を批判したフランシス・ジャンソンの『Les Temps Modernes』誌の記事を契機として修復不能のものとなったのである。カミユは自らの存在を賭した仕事『反抗的人間』によって、不条理を宿命づけられた現代人の反抗による闘いのあり方を提示した上で、コミュニズム、ファシズム、ニヒリズム、さらにはマルクスの科学的メシアニズムなどを「反抗的人間」の観点から論じている。そしてここでもカミユにとって、スターリニズムは避けては通れない問題であった。ジャンソンの批判は、カミユの「美しすぎる抗議」[35)] に向けられる。カミユの歴史に対する態度は、何も企てようとしない消極的なもので些かも行動の基準にはならないと非難するのである。

> L'histoire nous prend, mais nous la comprenons; nous ne cessons

de la faire, mais elle nous fait, aussi, — et le risque est sérieux, pour nous, d'être par elle assez souvent «refaits». Or il est vrai que Camus, justement, tend à nous proposer de ne l'être jamais, par le moyen de ne rien entreprendre: mais ce principe négatif ne saurait fournir aucun critère pour le comportement pratique, puisqu'il s'agit, précisément, de ne plus se comporter du tout.[36)]

そして『反抗的人間』に「失敗した偉大な書」[37)] というレッテルを献上している。カミユはすぐさま反論し、『反抗的人間』に対する誤解を指摘すると同時にジャンソンの歴史を絶対視する見方に警鐘を鳴らしている。

L'Homme Révolté, en effet, se propose (…) de démontrer que l'antihistorisme pur, (…) est aussi fâcheux que le pur historisme. Il y est écrit, à l'usage de ceux qui veulent lire, que celui qui ne croit qu'à l'histoire marche à la terreur et celui qui ne croit à rien d'elle autorise la terreur. (…)

La vérité qu'il faut récrire et réaffirmer en face de votre article est que mon livre ne nie pas l'histoire (…) mais critique seulement l'attitude qui vise à faire de l'histoire un absolu.[38)]

この記事はジャンソンではなく、『Les Temps Modernes』誌主筆に宛てた手紙の形で書かれていた。そこでこれに応えたサルトルは、それまでカミユに抱いていた友情から書き起こし、「ムルソーは、シーシュポスはどこへ？」「革命の闘士は？」とカミユの変貌を嘆いてみせる。そしてカミユが、かつてサルトルの目にいかなる像として映っていたかを描き出すのだ。

Notre amitié n'était pas facile mais je la regretterai. Si vous la rompez aujourd'hui, c'est sans doute qu'elle devait se rompre.(…) Où est Meursault, Camus? Où est Sisyphe? Où sont aujourd'hui ces trotzkytes

du cœur, qui prêchaient la Révolution permanente? Assassinés, sans doute, ou en exil.(…)

Vous avez été pour nous — demain vous pouvez l'être encore — l'admirable conjonction d'une personne, d'une action et d'une œuvre. C'était en 45: on découvrait Camus, le résistant, comme on avait découvert Camus, l'auteur de *l'Étranger*. (…) vous résumiez en vous les conflits de l'époque, et vous les dépassiez par votre ardeur à les vivre. Vous étiez une *personne*, la plus complexe et la plus riche: (…)[39]

そして最後は、歴史を退けテロリストになってしまったカミユに、もうこれ以上反論することはないだろう、と結んでいる。

La Terreur est une violence abstraite. Vous êtes devenu terroriste et violent quand l'histoire — que vous rejetiez — vous a rejeté à son tour: c'est que vous n'étiez plus qu'une abstraction de révolté. (…) La Revue vous est ouverte si vous voulez me répondre, mais moi, je ne vous répondrai plus. J'ai dit ce que vous avez été pour moi et ce que vous êtes à présent. Mais quoi que vous puissiez dire ou faire en retour je me refuse à vous combattre. J'espère que notre silence fera oublier cette polémique.[40]

『Les Temps Modernes』誌上で交わされた論争は当時大きな反響を呼んだが、カミユがこれによって深く傷つき心身共に憔悴していたことは、先のジルーの記事に見たとおりである。

3.3. バタイユによる擁護

バタイユはサルトル・カミユ論争に際して、それまでカミユについて書いてきた自身の論評の延長戦上でカミユの擁護を行っている。まずジャンソンが批判した歴史の問題に関しては、『Les Temps Modernes』誌は歴史に賭け

る態度を選択しているが、歴史は反抗すべき対象であるとしてカミユへの共感を示している。

> (…) il est ridicule de nier l'histoire, mais du moins nous pouvons, si nous sommes pour cela assez forts — assez lucides surtout —, prendre sur nous de lui opposer un refus, contre l'histoire nous pouvons en un mot nous *révolter*. (…)
>
> *Les Temps Modernes* optent pour l'histoire.[41)]

バタイユは以前、カミユの戯曲『誤解』や『カリギュラ』の分析を行った際にも、「反抗に関する考察」をこれらと平行して論じており、すでにカミユの道徳の基礎を「反抗」に見ていた。

> L'essentiel de la révolte, envisagé à partir de la position morale de Camus, réside en ceci que les héros de ses tragédies, que Caligula et Martha sont révoltés, que même ils donnent à la révolte une expression achevée, extrême, et par un côté décisive.[42)]

『反抗的人間』を巡る論争では、バタイユはサルトルによるものよりも、むしろブルトンによる攻撃に対して長い反論を書き、それが矛盾と誤解によるものであることを厳しく糾弾している。

> (…) s'il ne manquait pas d'imagination, mais parfaitement, dès qu'on le sort de ses merveilleux domaines, il aurait apprécié les trésors que le livre de Camus lui apportait.[43)]

バタイユの考えるカミユの功績は、「反抗のジレンマに対する唯一の答えは中庸である。」という問題を初めてトータルな形で提起したことにあるという[44)]。その上でカミユは、絶対体制、絶対意志に反対するのである、と。

バタイユはカミユの「無実の殺人者」（a）に、ブルトンの有名な文章（b）を重ね合わせ、両者が類縁関係にあることを示そうとする。

> (a) «La révolte nous met au contraire sur le chemin d'une culpabilité calculée. Son seul espoir, mais invincible, s'incarne à la limite dans des meurtriers innocents.»
>
> (b) «L'acte surréaliste le plus simple consiste, revolvers aux poings, à descendre dans la rue et à tirer au hasard, tant qu'on peut, dans la foule.» [45)]

そしてかつてバタイユを攻撃したことを後悔したことのあるブルトンが、同じ過ちを繰り返さないよう遠回しに諫めるのである。

3.4.「非－知について」の講演

サルトル・カミユ論争と重なる時期に、バタイユは「非－知について」と題する講演を行っている。その草稿をバタイユは晩年、Tel Quel 誌の編集部に渡しているが、それはメモの状態の部分が含まれていたり、欠けている章もあったりする不十分なものだった。それでも編集部はそのまま掲載した。記事のあとがきで当時の編集長ジャン＝エデルン・アリエとソレルスはその理由を述べた上で、いずれ Tel Quel 誌上でバタイユ特集を組んでオマージュを捧げることを約している。

> (…) il nous a paru préférable, Georges Bataille n'ayant pu revoir les épreuves, de donner les manuscrits dans leur état original. (…) Il est inutile de souligner l'importance de ces textes qui reprennent et précisent les thèmes capitaux de la pensée de G. Bataille, non plus que la perspective prise par eux du fait de sa mort. Cette mort, celle d'un homme dont le génie nous semblait un des plus incontestables de ce temps, nous touche d'une façon particulière. Nous rendrons hommage à

G. Bataille dans l'un de nos prochains numéros.[46)]

バタイユの 4 回にわたる講演の中、1952 年 11 月の 3 回目の講演は「非－知と反抗」と題されており、冒頭近くに次の様な表現がある。

> Comme l'annonce de ma conférence vous en a prévenus, j'ai l'intention de parler de la révolte. (…) Ceux qui ont suivi l'exposé de ma pensée ont dû saisir qu'elle était d'une manière fondamentale une révolte perpétuelle contre elle-même.[47)]

この文章は先に引用したカミユ擁護のための発言と呼応していることが見て取れる。別の講演でも同様の表現を違う角度から述べているものがあり、当時のバタイユがカミユの反抗の姿勢に強く共鳴していたことを窺わせる。

ところで Tel Quel 誌編集部が 10 号にバタイユの「非－知についての講演」の草稿を掲載する準備を進めていたとき、当時編集メンバーに加わったばかりのミシェル・ドゥギーのもとにバタイユが亡くなった旨の電話連絡が入り、バタイユの遺族と親友のミシェル・レリスが原稿の掲載延期の希望を伝えてきた。ドゥギーはその場で承諾の返事をしたが、後から話を聞いた編集長のアリエは激怒し、決定を覆し雑誌の発行を遅らせてまでバタイユの遺稿を掲載させた。先の引用文からも読み取れるように、バタイユの書いたものを世に出すことがどれほど重要な意味を持つかをアリエは十分に理解していたのである。ドゥギーは、この件に加え Tel Quel 誌とクリティック誌の両方で仕事をしていたことも災いして、編集メンバーを除名されている[48)]。

3.5. 論争以後のサルトルとジャンソン

1960 年、サルトルは多くの作家や文化人とともに「アルジェリア戦争における不服従の権利に関する宣言（121 人の宣言）」に署名し、その結果公共文化施設から閉め出される憂き目に遭ったが、その後も活発な政治活動を続け、1964 年には「飢えた子供を前にして『嘔吐』は意味を持つか。」とい

う問いかけをして論議を巻き起こしている。1968年の5月革命に際しては積極的に学生を支持し、『Le Nouvel Observateur』誌上で運動の中心人物ダニエル・コーン＝バンディと対談を行ったり、ソルボンヌで学生との対話集会に応じたりしている。

一方ジャンソンは、アルジェリア戦争に際して「ジャンソン・グループ」を結成して中心的な役割を果たしており、逃亡中の1960年の「ジャンソン裁判」では本人不在のまま禁固10年の判決を受けている。その後1967年に、5月革命を予告したといわれるジャン＝リュック・ゴダール監督の映画『中国女』に実名で出演し、アンヌ・ヴィアゼムスキー演じるナンテール校の女子学生ヴェロニクと、大学におけるテロの可能性について議論をしている。ゴダールはこの映画の中でヴェロニクに、「もし私に勇気があればソルボンヌ大学やルーヴル美術館、コメディ・フランセーズ座をダイナマイトで吹っ飛ばすでしょうよ。」と言わせているが、これはマリネッティの「未来派宣言」の中の「われわれは美術館と図書館を破壊し、(…) 闘うことを欲する。」への引喩である。

2002年11月、かつてカミユのドキュメンタリー・フィルムを制作したジャン・ダニエルは、『Le Nouvel Observateur』誌上に「カミユとテロリスム」と題した記事を掲載し、パレスチナでの自爆テロ「カミカゼ」を抱える今日、カミユの「犠牲者でも死刑執行人でもない」あり方の持つ意味を改めて問いかけている[49)]。カミユの苦悩は、その作品『正義の人々』に描かれたテロリストの青年詩人カリャーエフに重ね合わせることが出来るだろう。それはテロの現場で、自分が襲撃すべき相手の馬車の中に子供の姿を見つけ、ついに手にした爆弾を使うことが出来なかった人間の苦悩である。

4.0. ブルトンによる第2の否認

4.1. バタイユとブルトンの軋轢と和解

本稿1章で引用したバタイユの、『エロスの涙』執筆中にロ・デュカに宛てた手紙の中、1960年3月5日付のものに次のような記述がある。

En particulier, je tiens dès aujourd'hui à vous parler du principe d'une conférence que je ferais pour la sortie du livre. Au sujet de cette conférence, je chercherai à m'entendre avec André Breton.[50)]

これは長年にわたるブルトンとの争いを正式に終結させたいと望んだバタイユの「和解」の申し入れと考えられる。実際の2人の最晩年の関係は、例えばソレルスが目撃したという以下の感動的なシーンのように穏やかなものだったようだ。

(…) un jour de 1961, (…) au Pré-aux-Clercs, après des années de silence et de distance, Bataille et Breton, par hasard, se retrouvèrent, échangèrent quelques mots anodins et se firent la promesse vaine de se revoir bientôt. [51)]

ところで過去のブルトンとバタイユの間の論争と和解は1度だけにはとどまらなかった。1929年、ブルトンは『シュルレアリスム第2宣言』でバタイユを激しい調子で非難したが、これはバタイユのスカトロジーを攻撃しただけでなく、当時バタイユがロベール・デスノス他ブルトンから離れたメンバーを結集した事に反発したものでもあった。

M. Bataille fait profession de ne vouloir considérer au monde que ce qu'il y a de plus vil, de plus décourageant et de plus corrompu (…)

Peut-être M. Bataille est-il de force à les grouper et qu'il y parvienne, à mon sens, sera très intéressant. Prenant le départ pour la course que, nous venons de le voir, M. Bataille organise, il y a déjà: MM. Desnos, Leiris, Limbour, Masson et Vitrac: (…)[52)]

バタイユはすぐにデスノス等とパンフレット『屍骸』を発表して応酬し、さらにブルトンに宛てて激しい調子で反論を書いている。それが時を経て

1968 年、Tel Quel 誌に掲載された「『老練なもぐら』」である。

> Peu importent aux surréalistes les altérations qui en résultent: que l'inconscient ne soit plus qu'un pitoyable trésor poétique; que Sade, lâchement émasculé par ses apologistes, prenne figure d'idéaliste moralisateur...(…) et les surréalistes, (…) conservent obstinément la magnifique attitude icarienne.[53)]

マルクスの文章をエピグラフに掲げ、やはりマルクスの『ブリュメール 18 日』にある「老練なもぐら」（“vieille taupe”）をタイトルに使ったこの記事は、ブルトンの理想主義を容赦なく批判しているものだが、この威勢のいい記事は、この記事が載った Tel Quel 誌 34 号が刊行された 1968 年の風景に似合うものだったのではないだろうか。

バタイユとブルトンはその後 1935 年に和解し、反ファシズム運動体「コントル・アタック」を組織することになるが、翌年には早くも意見の不一致から分裂し、以後バタイユは『アセファル』誌の刊行と秘密結社「アセファル」の活動にのめり込んでいく。バタイユを非難するブルトンの文章の中に、サルトルがバタイユを攻撃する際に用いたのと同様の表現、すなわちバタイユの病的な精神状態への示唆とパスカル風の熱情を揶揄する表現が見られるのは偶然だろうか[54)]。

先に触れた最晩年のマドレーヌ・シャプサルとのインタビューでバタイユは、シュルレアリスムに対する見解と、シュルレアリスムと自分との関係を総括するかのように次のように語っている。

> Mes rapports avec le surréalisme je ne pourrais mieux les exprimer qu'en parlant d'une idée qui m'est venue, je crois hier ou avant-hier, de faire un livre qui porterait sur la première page de la couverture *Le surréalisme est mort* et sur l'envers de cette couverture *Vive le surréalisme*...(…)

> Eh bien, le surréalisme me paraît toucher à l'essentiel. (…) Une de mes difficultés, au début, avec le surréalisme, était que j'étais beaucoup plus dada que les surréalistes, ou du moins je l'étais encore alors qu'ils ne l'étaient plus. Il est certain que pour moi il faut aller à l'extrême, vers ce qu'on pourrait peut-être appeler mysticisme (…)[55)]

シュルレアリストと自分との相違点について語る上の文章の中でもバタイユは、かつてサルトルに献上された「神秘家」という宣告を忘れないでいることが分かる。

5.0. Tel Quel 誌の二様のスタンス

5.1. アンチ・イデオローグ

Tel Quel 誌創刊号の「宣言」を作成するに当たってソレルスとポンジュは、サルトルの『Les Temps Modernes』誌の「創刊の辞」を参照している。そしてそこに述べられている作家の社会参加の義務を否定した上で Tel Quel 誌独自の姿勢を打ち出そうとしている。それがいかなるイデオロギーにも与(くみ)しないことであり、その対象はマルクス主義のみならず、実存主義をも含むものであった。サルトルのアンガージュマンに対して、婉曲にしかし断固とした調子で拒否の姿勢を示しているのである。ある意味で Tel Quel 誌は、その存在のあり方そのものがアンチ・サルトルだったとも言えよう。Tel Quel 誌の創刊はカミユが事故死した年と同じ 1960 年である。Tel Quel 誌は表(おもて)だってサルトルとカミユの論争に意見を表明していないが、創刊号の最後にソレルスが匿名で書いたカミユに捧げる記事が、ある意思表示の形となっていると言えよう。

5.2. ブルトンへのオマージュ

Tel Quel 誌では創刊号から始まって毎号、最後のページに次号の予告を掲載している。創刊号の予告の中にはシュルレアリスムについてのアンケー

トが含まれていたが、この企画はブルトンが締め切りに間に合うように原稿を送ってこなかったため実現しなかった。それにも拘らず Tel Quel 誌では以後、毎号ブルトンの記事の掲載を予告しており、それはブルトンの死後 1967 年まで続いたのである。だがこの一方的なラブコールは報われることがなかった。ソレルスは折に触れてブルトンへの言及をしているが、Tel Quel 誌に掲載されたシュルレアリストの作品や記事は、ポール・エリュアール、ジュリアン・グラックなどによるもの数篇にとどまりそれ程多くはない。

6.0. アラン・ロブ＝グリエの存在

6.1. ロブ＝グリエと Tel Quel 誌の蜜月と決別

2001 年、アラン・ロブ＝グリエは小説作品としては久しぶりに『反復』を出版した。2001 年はヌーヴォー・ロマンの生みの親、ジェローム・ランドンが亡くなった年である。同年、やはりヌーヴォー・ロマンの作家、クロード・シモンの『路面電車』も出版されており、ランドンへの手向けともなっている。

Tel Quel 誌は創刊時、ソレルス、アリエを中心としてメンバーのヌーヴォー・ロマンへの関心は極めて高く、ロブ＝グリエ他のヌーヴォー・ロマンの作家たちとの繋がりも様々な形で持たれていた。Tel Quel 誌創刊号にはクロード・シモンの『フランドルへの道』の冒頭部分が掲載されており、メンバーによる近刊小説評価のコラムでは、ロブ＝グリエの『迷路の中で』が高い得点を獲得し、フランソワーズ・サガンの『ブラームスはお好き』に対する評価の低さと好対照をなしている。その後もアラン・レネとの合作『去年マリエンバードで』のロブ＝グリエによるシネ・コンテや、ミシェル・ビュトール、ナタリー・サロート等の作品が数多く掲載されている。ロブ＝グリエと Tel Quel 誌の親密な関係に亀裂が生じたきっかけは、ロブ＝グリエが 1957 年に NRF 誌に掲載した「自然・ヒューマニズム・悲劇」と題された評論で、『物の味方』のフランシス・ポンジュを批判したことだった。ポ

ンジュは「宣言」の共同執筆者であるだけでなく、一貫して Tel Quel 誌メンバーの精神的支柱でもあった。ロブ＝グリエは、サルトルのポンジュ論に取り上げられているポンジュの物に対する視点が『嘔吐』のロカンタンに通じるものであることを指摘すると同時に、いずれの場合も物を人間の思考に引き寄せて見ているのであり、物そのものの現実を見ていないとして否定している。そしてポンジュの詩における物の描き方は「科学を馬鹿にしている」[56] と断じている。

> Noyé dans la *profondeur* des choses, l'homme finit par ne même plus les apercevoir; (…) «Bref, il s'agit moins d'observer le galet que de s'installer en son cœur et de voir le monde avec ses yeux... »; c'est à propos de Francis Ponge que Sartre écrit ces mots. Au Roquentin de *la Nausé* il faisait dire: «*J'étais* la racine du marronnier.» Les deux positions ne sont pas sans rapport: il est question, dans ces deux cas, de penser «avec les choses» et non pas *sur* elles. (…)
>
> Affirmer qu'il parle *pour* les choses*, avec* elles, dans leur *cœur,* revient dans ces conditions nier leur réalité, leur présence opaque: dans cet univers peuplé des choses, celles-ci ne sont plus pour l'homme que des miroirs qui lui renvoient sans fin sa propre image. (…) nous sommes obligés de briser tous ces miroirs disposés avec art par Francis Ponge, pour retrouver les objets durs et secs qui sont par derrière, inentamés, aussi étrangers qu'auparavant.[57]

ソレルスはすでに Tel Quel 誌 2 号の「アラン・ロブ＝グリエに関する 7 つの命題」と題する『迷路の中で』論の中で、上に挙げたロブ＝グリエの文章におけるポンジュの扱いが軽過ぎると咎めている[58]。その後ロブ＝グリエの評論が他の文章とともに『ヌーヴォー・ロマンのために』と題する本にまとめられて 1963 年に刊行されると、翌年、今度ははっきりと批判的な記事を Tel Quel 誌の書評欄に載せた。これに対してロブ＝グリエは、1965 年 1

月付の手紙でソレルス等に別れを告げることになったのである。

> Je lis par hasard votre petite note sur *Pour un nouveau roman.* Tiens....Tiens....! On me laisse tomber! (…) Mais tant pis. Nous avons fait un bout de route ensemble. Il ne me reste plus qu'à vous souhaiter bon voyage... [59)]

6.2. ロブ＝グリエの日本講演における「総括」と “Rien” について

アラン・ロブ＝グリエは 1978 年に来日した際、10 月に東京日仏学院で「実存主義からヌーヴォー・ロマンへ」と題する講演を行っている。その時のフランス語原稿は残っていないが、月刊誌『海』が翌年 1 月、ロブ＝グリエ特集を組んでその邦訳を掲載している。その中でロブ＝グリエは、自分にとっての最も重要な小説としてサルトルの『嘔吐』とカミユの『異邦人』を挙げている。また 1960 年頃レニングラードで開かれたシンポジウムの席上でサルトルが、ヌーヴォー・ロマンを自分の直接の継承者として紹介したことに喜びを表明している。本稿 3 章でも触れたサルトルの『異邦人』論については、複合過去時制の使用によって得られた効果について述べている箇所を引用して賛意を表する一方で、サルトルの長編小説『自由への道』は単純過去で書かれているために主人公は自由を見出すことが出来ず、作品が未完に終わってしまっていると分析している。ロブ＝グリエはさらに、50 年代のイタリアの批評家バリリの「一般化されたエピファニー」という概念を用いて、「神のない世界の啓示」、「無のエピファニー」としてロカンタンが小石を前にした時、ムルソーが母の棺の釘を前にした時に訪れたであろう不意の啓示の瞬間について述べている。

> 「『そうだ、これだ！　これなんだ。そいつがここにある。』だが、それは無の啓示なのだ。というのも、何もないからだ。『そいつがここにある』といっても《そいつ》は、要するに、何でもない。私は《そいつ》について何も言うことが出来ず、《そいつ》は私ではない。そして

《そいつ》が私でない以上、《そいつ》は何ものでもないのと同じなのだ。」

「『異邦人』の書き出しに現れたあの《何でもないもの》rien (…)。」[60)]

前にサルトルがバタイユを批判した文章の中で使われていた “rien” をここに再び見出すことになった。パズルの最後のピースが埋まり、5 人の作家が Tel Quel 誌とソレルスを介して円環を閉じるようにして繋がっていくのを見ることが出来る。それを可能にしたいくつかの「符合」—「符合」はバタイユの処女作『眼球譚』初版第 2 部の副題だった。

（了）

註

1）Philippe Sollers, «L’Acte Bataille», dans *Bataille*, Union Générale d’Éditions, coll. «10/18», 1973, p. 11.

2）*ibid*., p. 11.

3）*ibid.*, Philippe Sollers, «Intervention», p. 9.

4）例えば次の『ル・モンド』紙の記事が例として挙げられる。«Ce qui caractérise actuellement notre vie publique, c’est l’ennui. Les Français s’ennuient.», *Le Monde*, le 15 mars 1968. (Margaret Atack, *May 68 in French Fiction and Film*, Oxford University Press, 1999, p. 12 からの孫引き。Atack はまた Simone de Beauvoir の “Les Belles Images” を、この時期のエリート階級の倦怠感を象徴する小説として挙げている。

5）«Déclaration», *Tel Quel* n° 1, Éditions du Seuil, 1960, pp. 3, 4. および拙稿『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 N° 34、Tel Quel は何をしたか（Ⅰ）』（2002 年 3 月）を参照されたい。

6）«La révolution ici maintenant», *Tel Quel* n° 34, 1968, pp. 3, 4.

7）J. M. Lo Duca, «Georges Bataille, *au loin*... », dans Georges Bataille, *Les larmes d’Éros*, Société nouvelle des éditions Pauvert, 1981, p. VII.

8）*ibid.*, «Lettres inédites», p. XV.（強調筆者）

9）*ibid*., p. XVIII.（強調筆者）

10）*ibid*., pp. XIII, XIV.（強調筆者）

11）«Celui-ci（=le titre）vient d’un tableau de l’école de Fontainebleau, longtemps attribué au Rosso et connu sous le titre: «Vénus pleurant la mort d’Adonis.»», Georges Bataille, *Œuvres Compètes* X, Notes pour *Les*

larmes d'Éros, Éditions Gallimard, 1987, p. 716.

12）Georges Bataille, *Les larmes d'Éros, opt. cit.,* «En guise de conclusion》, p. 239.

13）*ibid*., «Avant-propos», *ibid*., p. XXII.

14）*ibid*., p. 141.

15）Philippe Sollers, «Lecture de Poussin», *Tel Quel* n° 5, Éditions du Seuil, 1961, p. 23 – p. 39.

16）Georges Bataille, *Les larmes d'Éros, opt. cit.,* p. 215.

17）Philippe Sollers, *Les Passions de Francis Bacon*, Éditions Gallimard, 1996.

18）Madeleine Chapsal, «Georges Bataille», dans *Quinze écrivains: entretiens*, René Julliard, 1963, p. 13.

19）«*Je vous rappelle la conclusion de l'article de Sartre en forme de tir de barrage:*» Philippe Sollers, «Intervention», dans *Bataille, opt. cit.,* p. 9.

20）Jean-Paul Sartre, «Un nouveau mystique», *Situations I*, Librairie Gallimard, 1947, p. 152.

21）*ibid*., p. 161.

22）*ibid*., p. 183.（強調筆者）

23）Michel Surya, *Georges Bataille*: *La mort à l'œuvre*, Éditions Garamont, Librairie Séguir, 1973, p. 527. ジェローム・ランドンはこの時期、ロブ＝グリエの『ヌーヴォー・ロマンのために』以後、出版方針を人文科学へとシフトしている。

24）Jean-Paul Sartre, «Un nouveau mystique», *Situations I, opt. cit.,* p. 186.

25）*ibid*., pp. 187, 188.

26）Georges Bataille, «Sur Nietzsche: Réponse à Jean-Paul Sartre», *O. C.* VI, Éditions Gallimard, 1973, p. 196.

27）*ibid*., pp. 195, 198.（強調筆者）

28）*ibid*., p. 200 – p. 202.

29）Madeleine Chapsal, *Quinze écrivains: entretiens, opt. cit.,* p. 19.（強調筆者）

30）*ibid*., p. 20.

31）«Discussion sur le péché», Georges Bataille, *O. C*. VI, *opt. cit.*, p. 315 – p. 359. 討論会にはブランショ、レリス、クロソウスキー、カミユ等、バタイユに親しいメンバーもいたが、サルトルを始めボヴォワール、メルロー・ポンティの他ジャン・イポリット、ガブリエル・マルセル、ダニエリュー神父等、バタイユの論敵が数多くいた。

32）Françoise Giroud, «Camus, l'homme blessé», *Le Nouvel Observateur*, 16-22 décembre, 1999, p. 19.

33）Jean-Paul Sartre, «Explication de *L'Étranger*», *Situations I, opt. cit.,* pp. 99, 106.（強調筆者）

34）*ibid*., pp. 117, 118.

35）Francis Jeanson, «Albert Camus ou l'âme révoltée.», *Les Temps Modernes* n° 79, 1952, p. 2072.

36）*ibid*., p. 2089.（強調筆者）

37）*ibid*., p. 2090.

38）Albert Camus, «Lettre au directeur des «Temps Modernes».», *Les Temps Modernes* n° 82, 1952, pp. 323, 324.（強調筆者）

39）Jean-Paul Sartre, «Réponse à Albert Camus», *ibid*., pp. 334, 345, 346.（強調筆者）

40）*ibid*., p. 353.

41）Georges Bataille, «*L'affaire de "L'Homme révolté"*», *O. C.* XII, Éditions Gallimard, 1988, pp. 232, 234.

42）Georges Bataille, «*La morale du malheur:* «*La Peste*»», *O. C.* XI, Éditions Gallimard, 1988, p. 244.

43）Georges Bataille, «*Le temps de la révolte*», *O. C.* XII, *opt. cit.,* p. 154.

44）*ibid*., p. 159.

45）*ibid*., p. 160.

46）«*Conférences sur le Non-Savoir*», *Tel Quel* n° 10, Éditions du Seuil, 1962, p. 20.

47）*ibid*., p. 17.（強調筆者）

48）Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel*, Éditions du Seuil, 1995 , p. 113.

49）Jean Daniel, «Camus et le terrorisme», *Le Nouvel Observateur*, 14-20 novembre, 2002, p. 24 – p. 27.

50）Georges Bataille, *Les larmes d'Éros, opt. cit.,* «Lettres inédites», p. xv.（強調筆者）

51）Philippe Forest, *Histoire de Te Quel, opt. cit.,* p. 112.

52）André Breton, *Les manifestes du surréalisme*, Le Sagittaire, 1955, p. 90.（強調筆者）

53）«*La «vieille taupe» et le préfixe* sur *dans les mots* surhomme *et* surréaliste», *Tel Quel* n° 34, *opt. cit.,* p. 12.（強調筆者）

54）«c'est le sort que M. Bataille entend faire à un petit nombre d'idées particulières qu'il a et dont, étant donné leur caractère, il s'agira de

savoir si elles ne relèvent pas de la médecine ou de l'exorcisme, car, (…) argument suprême contre le *moi*, nous connaissons l'antienne pascalienne et imbécile;», André Breton, *Les manifestes du surréalisme, opt. cit.*, p. 91.（強調筆者）

55）Madeleine Chapsal, *Quinze écrivains: entretiens, opt. cit.*, p. 16.

56）Alain Robbe-Grillet, *Pour un nouveau roman*, Les Éditions de Minuit, 1963, p. 64.

57）*ibid*., p. 61 – p. 63.（強調筆者）

58）«il traite Ponge avec une si curieuse légèreté et sans atteindre à l'essentiel (...) », Philippe Sollers, «Sept propositions sur Alain Robbe-Grillet», *Tel Quel* n° 2, Éditions du Seuil, 1960, p. 51.

59）Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel, opt. cit.*, p. 176.

60）文芸雑誌『海』、中央公論社、1979 年新年特大号、324、326 頁。（強調筆者）